李開先編『改定元賢傳奇』に関する考察

福永美佳

1　はじめに

明代嘉靖八年〔一五二九〕の進士李開先〔一五〇一～一五六八〕は詩文詞曲に関する造詣が深く、蔵書家として知られ、作家や批評家としての一面も持つ。特に演劇という点からみれば、南戯を創作しているだけでなく、元雑劇テクストの収集編纂も行っている。李開先により編纂された『改定元賢傳奇』は、明代に刊行された元雑劇選集のなかで現存する最古のものである。

『改定元賢傳奇』の特色については、赤松紀彦が「陳摶高臥」「青衫涙」に対する校勘に基づき次のような指摘を行っている[1]。

『改定元賢傳奇』は、従来、その刊行時期がとびぬけて早く、また刊行者の李開先自身が元刊本をはじめとする数多くのテキストを所蔵していたことから、元刊本に近い、古いかたちを残しているのではないかという推測を生んできた。しかしながら、以上に述べたとおり、実際にはのちの明刊本と同じ系統に属することは明らかであり、むしろ明抄本、明刊本各テキストの関係を考える上での貴重な資料となるものである。

ここには『改定元賢傳奇』が、明刊の元雑劇集と同系統に属するものとして位置付けられている。とはいえ元刊本が一種しか伝わっていないのに対し、明刊本はこれまでに複数確認されており、テクスト間で異同が認められるのである。であるとすれば『改定元賢傳奇』はどの明刊本に近いといえるのだろうか。

そこで注目したいのが明代の戯曲理論書『詞謔』である。『詞謔』もまた李開先によるものとされ、こ

こには批評の他、元雑劇テクストの一部も収められている。現在『改定元賢傳奇』には六種の元雑劇しか伝わらないが、このうち「揚州夢」「梧桐雨」「兩世姻縁」の三種が『詞諧』にも収録されている。

本論では、紙面の都合上「揚州夢」に絞り、『改定元賢傳奇』収載の「揚州夢」と『詞諧』収載の「揚州夢」の比較をとおし、両者の異同を明らかにするとともに、他の明刊本に収載される「揚州夢」テクストと照らし合わせることにより、現時点で『改定元賢傳奇』に最も近い明刊本を特定する[2]。

2 『改定元賢傳奇』と『詞諧』

南戯が流行していた明代において、『改定元賢傳奇』はどのようにして編まれたのか。この元雑劇集を刊行するに至った経緯について、「改定元賢傳奇序」には、李開先が所有する千を超えるテクストの中から、門人に五十種を選び取らせたとあり[3]、さらに続けて次のように述べる[4]。

力又不能全刻、就中又精選十六種、刪繁帰約、改韻正音、調有不協、句有不穏、白有不切及太泛者、悉訂正之、且有代作者、因名其刻為『改定元賢傳奇』。

無理に全てを刊行することはできないので、その中からさらに十六種を精選し、ごちゃごちゃしているところを削ってまとめ、韻を改め音を正し、リズムがかみ合わないものや、言葉が安定しないもの、セリフがそぐわず薄っぺらいものは、悉くこれを訂正した。作者に代わるものである。そこで名を『改定元賢傳奇』とする。

ここには十六種とあるが、現存しているのは「青衫淚」「陳摶高臥」「揚州夢」「梧桐雨」「兩世姻縁」「悞入天台」の六種である。またこの序には『改定元賢傳奇』がテクスト改定後の元雑劇集である、と記されているのである。

一方、戯曲理論書である『詞諧』には李開先の署名があるわけではない。だが『先太常年譜』（先太常は李開先を指す）によると[5]、

家居二十七載、享林下清福、人生至此亦云足矣。惟蘇杭未得一游、普濟新修園未得一到、『詞謔』一書未成、尤可惜也。

家に居ること二十七年、田舎でゆったりとした晩年を過ごし、人生はここに至り十分である。ただ蘇州杭州を一度も旅せず、普濟新修園を訪れておらず、『詞謔』が未完成であることが、とても残念だ。

という言葉を、彼が亡くなる四日前に残していたことが記されている。これによると『詞謔』は李開先による未完の書ということになる。

では『改定元賢傳奇』が改訂後のテクストを集めたものだとすれば、『詞謔』収載のテクストとの間にどのような異同が生じているだろうか。

3 「揚州夢」テクストの校勘

「揚州夢」には、複数のテクストが現存する。傅惜華によれば[6]、『改定元賢傳奇』、『古名家雑劇』、『継志斎元明雑劇』、『元曲選』、柳枝集本（『古今名劇合選』の一部）、揚州叢刻本、元曲大観本に収められているとされる。この他にテクストの一部を伝えるものとして、『雍熙楽府』（第一折）と、『詞謔』（第一・二折）が知られている[7]。

このうち『改定元賢傳奇』と同じ嘉靖〔一五二二―一五六六〕刊の版本が伝わるのが『雍熙楽府』と『詞謔』である。その他は万歴年間〔一五七三―一六二〇〕以降のものである。なお『元曲選』以降に成立したもの（『元曲選』、柳枝集本、揚州叢刻本、元曲大観本）は書き換えの多い『元曲選』を底本とするため、考察の対象から外している。

では『改定元賢傳奇』収載テクストと『詞謔』収載テクストにはどのような違いがあるのだろうか。テクストの表記においては、『改定元賢傳奇』（改）、『詞謔』（詞）とする。

まず「揚州夢」第一折【混江龍】から次の例を挙げる。

（改）一箇箇着輕紗、籠異錦。
（詞）一箇箇著輕紗、□異錦。

四角で囲んだ部分に着目すると、『改定元賢伝奇』

収載テクストには「籠」という字があるが、『詞諧』収載テクストにはこれに当たる字がない。では他の明刊本ではどうだろうか。以下刊行年の古いものから『雍熙楽府』（雍）、『古名家雑劇』（古）、『継志斎元明雑劇』（継）の順に記載すると、次のとおりである。

（雍）＿＿＿着軽紗、穿異錦。
（古）一箇箇着軽紗、籠異錦。
（継）＿＿＿着輕紗、穿異錦。

これをみると、『雍熙楽府』、『継志斎元明雑劇』収載のテクストは一致するが、『改定元賢傳奇』とは違い、傍線部で示すように「一箇箇」がなく、四角で囲んだ部分には「穿」という字があてられている。これに対し、『古名家雑劇』収載の「揚州夢」は「輕」ではなく「軽」が用いられているのを除けば『改定元賢傳奇』と同じものである。

もう一例【油葫蘆】から挙げる。

（改）□綺羅叢封我做醉郷侯。
（詞）如今這綺羅叢封我做醉郷侯。

四角で囲むように『改定元賢伝奇』と『詞諧』には「如今這」の有無という違いがある。では他の明刊本ではどうであろうか。

（雍）我向綺羅叢封作醉郷侯。
（古）□綺羅叢封我做醉郷侯。
（継）我向綺羅叢裡封作醉郷侯。

『雍熙楽府』、『継志斎元明雑劇』収載のテクストには、四角で囲んだように「我向」があるが、『古名家雑劇』収載のテクストにはない。また傍線を引いた箇所をみると、『雍熙楽府』収載テクストと『継志斎元明雑劇』収載のテクストが他とは異なっている。

この時点で『改定元賢傳奇』収載「揚州夢」と、『雍熙楽府』、『継志斎元明雑劇』収載の各テクストは差が大きいといえる。よって『雍熙楽府』、『継志斎元明雑劇』収載のテクストを『改定元賢伝奇』収載「揚州夢」に近いテクストの候補から外すことにする。

これに対し、『古名家雑劇』収載テクストは一致する点が多いので、以下『改定元賢傳奇』、『詞謔』、『古名家雑劇』収載の各テクスト間で検討することにしたい。

【寄生草】からは次の例を挙げる。

（改）我□央了十箇千歳。
（詞）我空央了十箇千歳。
（古）我□央了十個千歳。

四角で囲んだ部分をみると、『詞謔』収載テクストには「空」という字があるが、『改定元賢伝奇』収載テクスト、『古名家雑劇』収載テクストにはない。補足になるが、「空」は『雍熙楽府』収載テクストにはあり、『継志斎元明雑劇』収載テクストにはないが、『改定元賢伝奇』収載テクストと少し異なる[8]。

さらに一折【青歌児】から次の例を挙げる。

（改）銀甲輔搦、金縷低謳。
（詞）錦箏輔搦、金縷低謳。
（古）銀甲輔搦、金縷低謳。

ここでは『改定元賢傳奇』本テクスト、『古名家雑劇』収載テクストでは四角の部分が「銀甲」だが、『詞謔』テクストでは「錦箏」である。なお『雍熙楽府』テクスト、『継志斎元明雑劇』収載テクストを確認したところ、いずれも「銀甲」である。よってここは『詞謔』テクストにしかない歌詞ということになる。

次に二折【滾繡毬】から次の例を挙げる。

（改）這酒恰便似瀉金莖中玉露擎仙掌。
（詞）這酒□似瀉金莖中玉露擎仙掌。
（古）這酒却便似瀉金莖中玉露擎仙掌。

四角で囲んだ部分は意味に大きな差をもたらすものではないが、三者で異なる。

次に【倘秀才】から挙げる。

（改）想當日□宴私宅翰林應奉。
（詞）想當日請俺去宴私宅翰林應奉。
（古）想當日□宴私宅翰林應奉。

ここでは四角で囲むように『詞諢』収載テクストにのみ「請俺去」があり、『改定元賢傳奇』、『古名家雑劇』収載テクストにはない。

次に【滾繡毬】から挙げる。

（改）我伴着些玉嬋娟相守相從。
（中略）□笑指前村問牧童。
（詞）我伴　步俊嬌娥、毎日價相守相從。
（中略）又何須　笑指前村問牧童。
（古）我伴着些玉嬋娟相守相從。
（中略）□笑指前村問牧童。

傍線部をみると、『改定元賢傳奇』、『古名家雑劇』収載テクストは一致するが、『詞諢』収載テクストが異なる。四角で囲んだ部分では『詞諢』テクストにのみ「又何須」がある。

その他の異同としては、第二折の最後にある曲牌名が挙げられる。『改定元賢傳奇』、『古名家雑劇』収載テクストでは【煞尾】だが、『詞諢』収載テクストでは【尾煞】である。第三折、四折は『詞諢』に伝わらないので、三者間の比較はここまでである。

以上の考察から、『改定元賢傳奇』収載「揚州夢」に近い明刊本は、『古名家雑劇』収載「揚州夢」であり、両者には意味上の差がほとんどないといえる。

その違いを指摘するとすれば、次のようなものである。

第四折【鴛鴦煞】から例を挙げる。

（改）今日箇兩眼惺惺。喚的箇一枕南柯夢初醒。
（古）今日箇兩眼惺惺。喚的個一枕南柯夢初醒。

四角で囲んだ部分をみると、『改定元賢傳奇』では「箇」を用いるが、『古名家雑劇』収載テクストでは「箇」と「個」を併用している。また波線部をみると『改定元賢伝奇』テクストでは「両」と記し、『古名家雑劇』では「兩」と記す。このように両者の違いは字体の違いにあるといえる。

4　おわりに

李開先の下で改定され編纂された『改定元賢傳奇』

に収載する「揚州夢」と、同じく李開先の著述とされる『詞謔』収載の「揚州夢」とを比べると、目立った異同は生じていない。だが点在する細かな異同を、のちの明刊本と照らし合わせると、『改定元賢傳奇』収載テクストは『古名家雑劇』収載の「揚州夢」とほぼ一致している。よって「揚州夢」についていえば、『改定元賢傳奇』に近いのは『古名家雑劇』収載テクストであるといえる。その上でこの二つのテクストの違いを挙げるならば、使用される字体の差にある。

1　赤松紀彦「南京図書館所蔵『改定元賢傳奇』について附「陳摶高臥」、「青衫淚」校勘記」（『中国における通俗文学の発展及びその影響』平成十―十二年度科学研究費補助金研究成果報告書、二〇〇一年）二三頁。

2　本稿で使用したテクストは次のとおりである。

○雑劇

・『改定元賢傳奇』李開先輯　南京図書館藏明嘉靖刻本影印　『續修四庫全書』一七六〇冊（上海古籍出版社、一九九五年）所収

・『古名家雑劇』新安徐氏刊　北京図書館及南京図書館藏　明萬歴刊本影印　『古本戯曲叢刊』四集（商務印書館、一九五八年）所収

・『元明雑劇』継志斎刊　北京図書館及大興傅氏藏　明萬歴刊本影印　前掲『古本戯曲叢刊』四集所収

○散曲集

・『雍熙楽府』二十巻　郭勛選輯　北平図書館藏　明嘉靖刊本影印『四部叢刊續編』（台湾商務印書館、一九六六年）所収

・『詞謔』李開先撰　中国国家図書館藏　明嘉靖刊本『中国古典戯曲論著集成』三（中国戯劇出版社、一九五九年）所収

3　李開先「改定元賢傳奇序」（卜鍵箋校『李開先全集（修訂本）』、上海古籍出版社、二〇一四年）。

4　前掲注3、五五六頁。

5　前掲注3、二五二五頁。

6　傅惜華著『元代雑劇全目』（作家出版社、一九五七年）。

7　小松謙『中国古典演劇研究』（汲古書院、二〇〇一年）。

8　『雍熙楽府』収載テクストでは「我 空 央到十箇千歳」とある。『継志斎元明雑劇』収載テクストでは「我央及了十個千歳」とある。